

時代小説と江戸・深川③

時代小説を書く材料

江東区深川江戸資料館

深川江戸資料館の展示室は、江戸時代天保年間（1830～1844）の深川佐賀町の町並みや庶民の生活が再現展示されており、時代小説の作家やファンが訪れることが少なくありません。その中で、作品の時代背景や、場所などを質問されることが多くあります。本号では、時代小説をより深く知るために参考となる資料や、作者が小説を書くにあたって参考とした資料について取り上げていきます。

1. 時代小説の世界

今日出版されている時代小説の舞台は江戸時代が大部分です。時代小説は、江戸時代を舞台にその時代の決まりや風俗というものが作品に織り込まれていますが、史実を書いたものとは少し異なります。例えば、池波正太郎の『鬼平犯科帳』は、長谷川平蔵などを史実から飛躍させ、自由に江戸時代において架空のストーリーを展開させます。作品で描かれる世界は、舞台が歴史的世界であれば、その中に架空の人物を置き、その時代のなかでどのように生きるかが書かれているといえます。

2. 作者と江戸時代の接点

深川地域が舞台として多く取り上げられている『鬼平犯科帳』の著者である池波正太郎は、江戸時代の「切絵図」を、時代小説を書いているものにとって欠かせないものであるとし、古地図や「江戸名所図会」「東都歳事記」などを、これらがなければ小説は生まれなかったと述懐しています。

また、藤沢周平は、歌川広重の浮世絵「名所江戸百景」から『日暮れ竹河岸』（文藝春秋/1996）が生まれたといいます。「名所江戸百景」は、広重の代表作として位置づけられる名所絵のシリーズで、その技法の斬新さもさることながら、当時の風俗を知ることができる貴重な資料です。『日暮れ竹河岸』には、日暮れ竹河岸（広重「京橋竹がし」）、大はし夕立ち少女（広重「大はしあたけの夕立」）、猿若町月あかり（広重「猿わか町よるの景」）などが短編として収録されています。藤沢は他にも、江戸文化・風俗の研究者である三田村鳶魚の『江戸武家事典』と『江戸生活

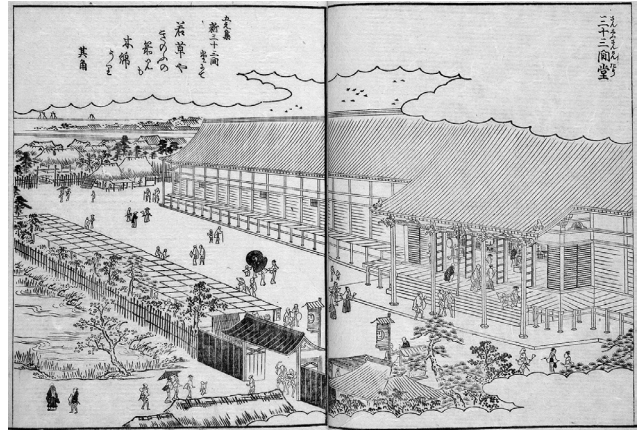


図1 三十三間堂（「江戸名所図会」）/ 館蔵

事典』は江戸時代に入っていき唯一の門のように思われたとしています。

3. 江戸時代を知る

作家の人たちは、時代小説を書くにあたり当時の人たちが残した記録や研究書などを調べ、それに基づき、脚色を加え作品を生み出していきます。ここでは書くための材料について、当時の主な資料を中心に紹介します。

(1)「切絵図」

切絵図は、「江戸大絵図」などのように江戸全般を表したのではなく、道筋や屋敷の名前なども記入された携帯用の地図で、御江戸大名小路や芝愛宕下、浅草御蔵前や本所深川の絵図などに分かれています。

切絵図の中でもとりわけ普及した尾張屋版のものは、武家や寺社、町屋や川・堀・海などが5色で色分けされていました。また、上・中・下の武家屋敷などを記号であらわしています。持ち運びに便利なよう、折りたたみ式になっていて、江戸時代にはこのような切絵図が多く出版されました。

(2)「江戸名所図会」

天保5年～同7年（1834～1836）に刊行された江戸の地誌で、神田（千代田区）の町名主斎藤幸雄・幸孝・幸成（月岑）の父子3代の手によって作られました。実地検分をもとに考証を踏まえた名所の由緒や伝来記事を記し、さらに神仏のご利益や名物の食べ物などの記事を加えた絵入りの冊子です。当時の

庶民の暮らしぶりや風俗など興味深く窺い知ることが出来ます。池波正太郎は、「江戸名所図会」から創作のヒントを多く得ているといいます。この中で江東区は、富岡八幡宮や三十三間堂(図1)、亀戸宰府天満宮(亀戸天神社)などが紹介されています。

(3)「守貞謄稿」

喜田川守貞が著した江戸時代の庶民の風俗の百科事典です。天保8年(1837)より書き始め、嘉永6年(1853)以降にも追書などを行ったという記述があります。その内容は、生業や遊戯、年中行事や食物などを図も交えて記されていて、上方と江戸との相違にも注目して書かれています。例えば、江戸では、あなご・芝えび・こはだ・貝の柱・するめなどの江戸前の海や河川でとれた魚介類をすり身にしないで衣を付けて油で揚げたものを「天ぷら」と言っていました。対して、上方では魚のすり身を丸めた「はんぺん(半平)」を揚げたものを「天ぷら」と呼んでいたとあります。

(4)「東都歳事記」

斎藤幸成(月岑)によって編まれ、天保9年(1838)に刊行されました。その内容は、江戸時代後期における江戸とその近郊の年中行事を正月から月順に記述したもので、豊富な絵の他、詳細な解説も付されています。江戸時代後期の最も詳しい年中行事の文献といえます。

(5)「武江年表」

「東都歳事記」と同じく斎藤幸成(月岑)によって編まれたもので、嘉永2年~同3年(1849~1850)に刊行されました。その内容は、江戸の地理の沿革や風俗の変遷、巷談異聞などを、徳川家康入府より編年体で記録したものです。江戸の社会風俗や世相を知るのに便利な資料です。

小説家の岡本綺堂は、『半七捕物帳』を執筆するにあたり「武江年表」などの資料を参考に、当時の天候などを史実に取り込んだというエピソードも残っています。

(6)「江戸買物独案内」

大坂の中川芳山堂(中川五郎左衛門)が文政7年

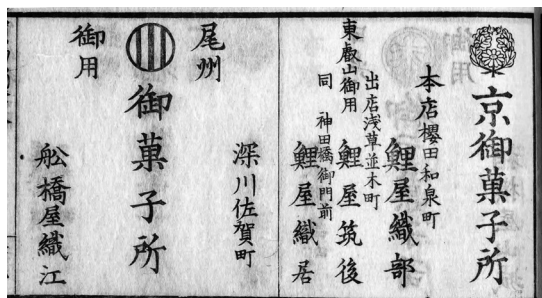


図2 「江戸買物独案内」(部分) / 国立国会図書館蔵

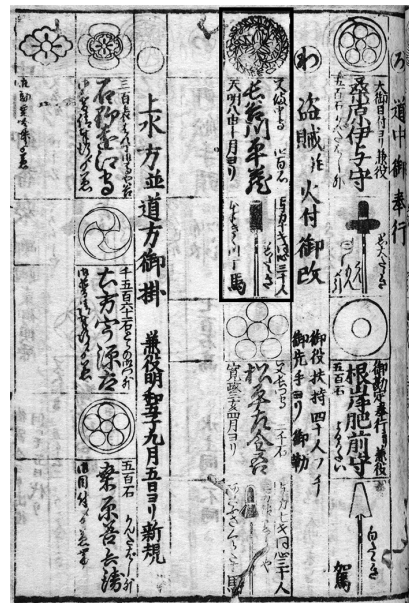


図3 「武鑑」(部分) / 国文学研究資料館蔵

(1824) に出版した、江戸におけるさまざまな買い物と飲食の店舗およそ2,600店について紹介を行う案内本です。この中には、常設展示室にある干鯛問屋の「多田屋又兵衛」や、深川を代表する菓子屋「船橋屋」(図2)の名前も見えます。

(7)「武鑑」

江戸時代に刊行された大名や旗本および幕府諸役人の姓名・家紋・石高・役職・幕府への献上品などを記したものです。現在の職員録のようなもので当時の武家社会の人物情報を盛り込んだ名鑑です。図3は寛政3年(1791)のもので、その中に『鬼平犯科帳』の主人公、長谷川平蔵の名も盗賊并火付御改(火付盗賊改方)の欄に記されているのが分かります。その年に誰がどの役職に就いていたか等が分かります。

(8)「江戸流行料理通」

江戸の料亭「八百善」の4代目主人栗山善四郎が著したもので、文政5年(1822)~天保6年(1835)に刊行された江戸の料亭料理を詳らかに記した最初の料理本です。その内容は、挿絵とともに具体的なレシピから調理器具の使い方など、基本的な心構え等も記された資料です。

時代小説の楽しみの一つに、当時の町の様子や人びとの暮らしが想像できることがあります。本号で紹介した資料は現在活字化されており手に取りやすいものもあります。時代小説と共に読むことで、より楽しむことができるのではないのでしょうか。

(主な参考文献)

西山松之助 他編『江戸学事典』(弘文館/1984)

池波正太郎『江戸切絵図散歩』(新潮社/1993)

『藤沢周平と浮世絵』(鶴岡市立藤沢周平記念館/2013)